



2014年7月号

今月のテーマは、
「S-160JA 型オーロラ観測ロケット模型」
です。



今月は「オーロラ観測ロケット模型」を紹介するよ！
紹介してくれるのは、山岸 久雄（やまぎし ひさお）さんです。

速くて複雑な動きのオーロラ。あの中に観測器を持ち込み、直接測りたいと研究者は考えました。しかし、オーロラの高さは100km以上。そこに観測器を運ぶにはロケットが必要です。第1次南極観測隊長を務めた永田武東大教授は南極でのロケット観測を計画しました。多くの人々の苦労の末、1970年1月、昭和基地にロケット観測設備が完成し、2月に1号機が発射されました。このロケットは、その実寸模型です。その後1985年まで、もっと大型のS-210JA型、S-310JA型ロケットがオーロラの中へ打ち込まれ、オーロラの研究が進みました。昭和基地のロケット観測は4名の隊員で準備され、発射の時は8名。世界最小のロケット発射チームです。私はその一員でした。



山岸さんはどんなお仕事をされているのですか？

ロケットや大型気球に観測器をのせ、オーロラから出る電波を調べる仕事をしてきました。その後、オーロラの姿を電波でとらえる装置の開発に取り組み、南極や北極で観測を続けています。現在は、南極の無人地帯で、太陽と風から電気を作り、観測データを衛星電話で日本へ送る自動観測装置の開発に取り組んでいます。